

年間第2主日

ヨハネ 1・35 - 42

2018.1.14 高円寺教会 9:30 ミサ
クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

アンデレがペトロに「メシアに出会った」言ったと表現されています。この「出会った」という言葉はギリシア語では「ヘウリスコー（完了形 ヘウレーカ）」という言葉です。この言葉はもともと「出会った」だけではなくて「見つけた」とか「発見した」という意味もあるそうです。ギリシアの哲学者アルキメデスがお風呂に入って叫んだ言葉と同じ言葉なのだそうです。

彼は王様からひとつの仕事を頼まれていました。それが結構難問だったので、悩んでいました。王様からいただいた難問とは「私がかぶっているこの王冠が純金でできているかどうか調べて欲しい」というものでした。難しいので、悩みながらお風呂に入るとひらめきがあった。伝説によると、そのまま裸でおうちに走って帰ったとかいうくらい、発見したことが嬉しかった。

彼のひらめきの内容は、まず王冠と同じ重さの純金を用意する。次に同じ大きさの容器を二つ用意する。そこに水を縁までいっぱいにして王冠と金をそれぞれの容器に入れる。すると水があふれてこぼれます。その後王冠と金を取り出し、残った水の重さをはかって、水の重さが同じなら純金だということが判る。しかし王冠を入れた方の残りの水が純金より軽い場合、王冠が純金ではないということが判ります。

金はこの世で最も重い物質なので、金でない金属を溶かして作った王冠だと純金に比べ沢山の金属を使うことになるので、純金の王冠に比べて体積が増えます。もし純金でない王冠と同じ重さの純金を水に入れたら、純金を入れた容器に比べて王冠の体積は増しているの、水が余計にこぼれ、残った水が軽くなるということです。

アンデレがペトロに対して言った言葉もこれと同じことばでした。アンデレはアルキメデスが難問を解いたのと同じくらい無茶苦茶嬉しかった。なぜならイエスに出会っただけでなく、「私は大事なことを発見した」のと同じぐらいの喜びで満たされていたからです。「自分が求めていたものが見つかった」という喜びです。それがこの言葉によく表されていると感じます。

洗礼者ヨハネは2人の弟子に向かって、「見よ、神の小羊だ」と言われ、アンデレはそれを見つけました。洗礼者ヨハネの言葉は私たちにも向けられています。そして私たちは祭壇の上に置かれるパンとぶどう酒を見つめます。

アンデレは、神の小羊であるイエスがメシアであることに気づいて、心の中が沸騰するような思いでいっぱいになりました。そしてあまりにも嬉しかった

ので、自分の中にとどめておくのが大変で、大切な兄弟にそれを伝えたくて、せき込んで言って、感動のうちに話します。それをカトリック教会は「福音宣教」と言います。

福音を宣べ伝えるということは、発見した喜びに満たされて、もう誰かに言いたくて言いたくて仕方がない状態から実現します。福音を宣べ伝えるとは、私たちが入門講座に参加したり、どこかの大学のサテライトなどに行ってお勉強しまくった結果ではありません。また、第二バチカン公会議の文書を全部読んだからできるようになったとか、聖書の最初から最後まで原文で読んだ人に与えられる資格などではありません。キリストに出会い、「イエスが本当に私たちの救いなんだ、喜びなんだ、これなしに私たちは生きていけないんだ」ということを心の底から分かったときに、私たちは福音宣教者へと変えられます。復活したイエス・キリストに出会って私たち自身がすっかり変えられた、という体験なしに、福音を述べ伝えられる人は一人もいません。

今日もミサの中で、私たちに向って主が示されます。私はほとんど毎日ミサをささげているけれど、いつもアンデレと同じような体験はありません。いつも「これはすごい発見や！」という感動に包まれたら良いのだけど、生活の習慣の一つで「今日もおつとめ終わったな…」という感じです。修道者になっても、毎日そんなに大きな発見や体験はありません。しかし、アンデレは人生の中での大きな体験を語ってくれました。私たちもきっと人生の中で同じ体験をすることになります。そのときには喜びをもって多くの人にその喜ばしい便りというものを伝えて行くことができますように、心をこめて共に祈りましょう。